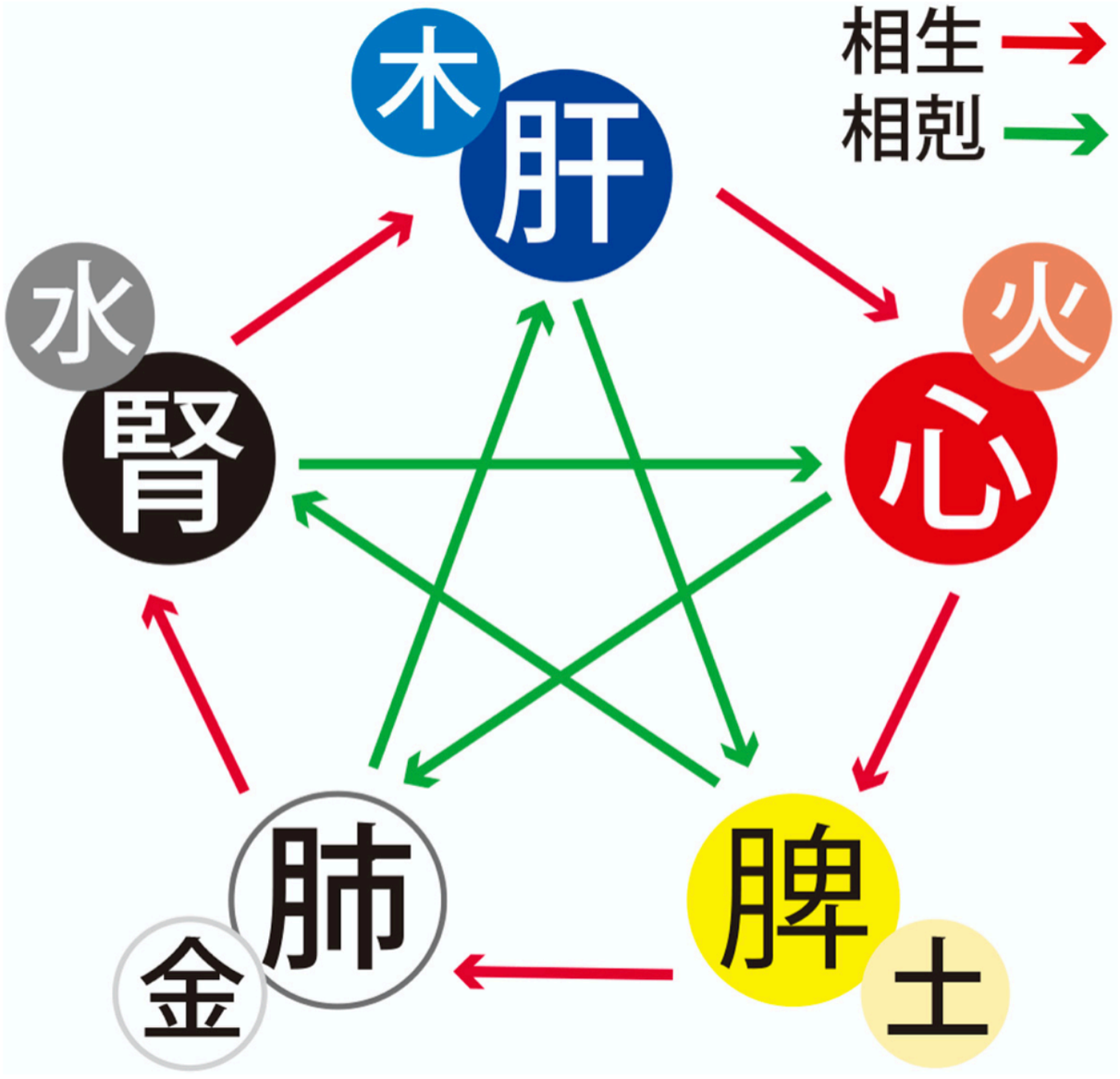
第21回　漢方相談員養成講座



11月8日（月）　インスタライブ

11月9日（火）　ZOOM講義

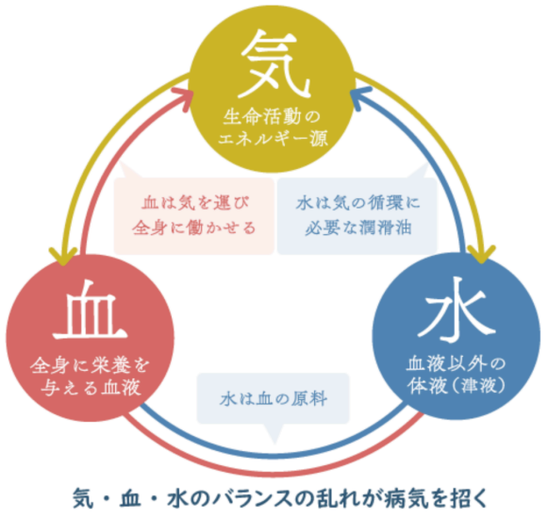
19:30開始

臓腑弁証
「肝・胆」

臓腑弁証とは

①八綱弁証

表・裏　寒・熱　虚・実　（陰・陽）



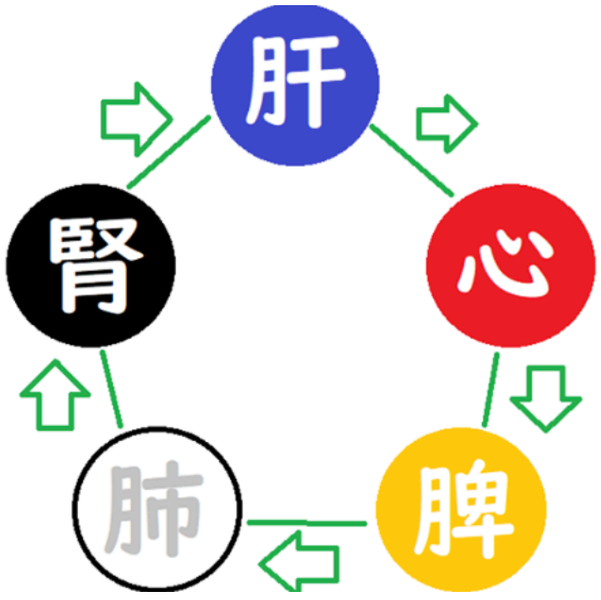
気・血・水のバランスの乱れが病気を招く

②気血津液弁証

体の構成成分である気・血・津液のどれが異常なのか

③臓腑弁証

五臓六腑のどこに異常があるのか



五臓④ 肝

下焦
げしょう

①疏泄を主る

②蔵血を主る

将軍の官

剛蔵　ごうぞう

五志：怒

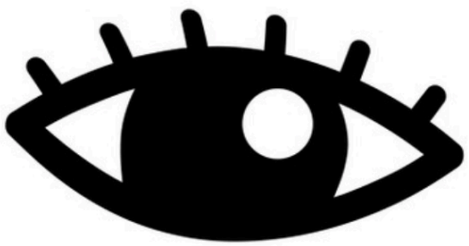
五液：涙

五主：筋

五華：爪

表裏：胆

五竅：目



胆　たん

肝　胆

1.胆汁の貯蔵と排泄

2.決断を主る

3.奇恒の腑に属する

肝

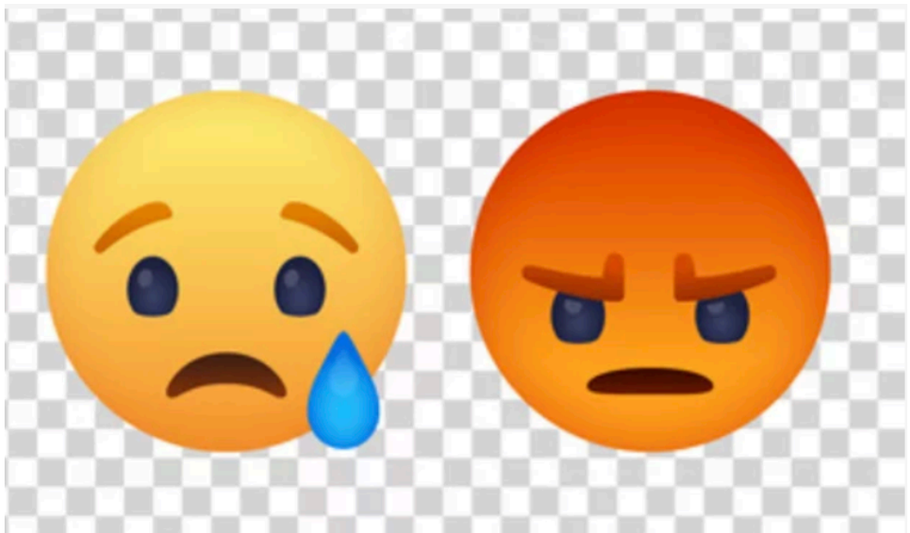
疏泄作用

胆汁排泄⟶小腸

肝の余気⟶

胆

肝胆病病証



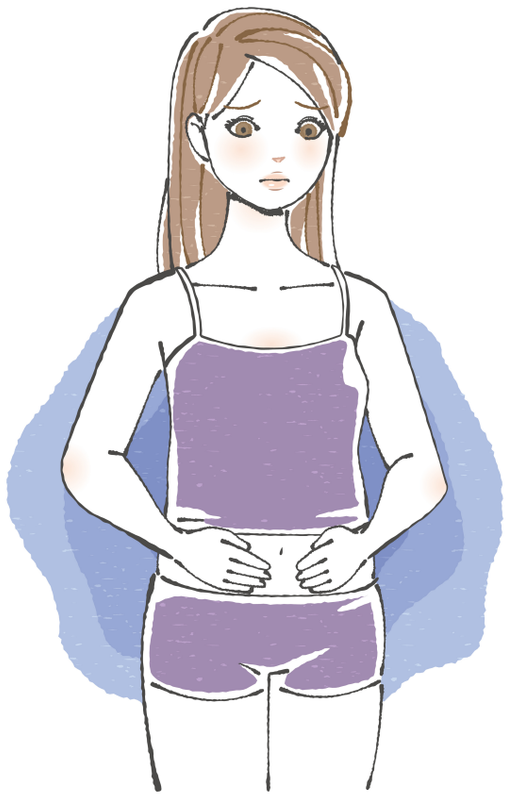
肝主謀慮　かんはぼうりょをつかさどる
胆主決断　たんはは決断をつかさどる

【肝胆病の主な病証】
肝胆の主な病証タイプには
実証に属す「肝気鬱結　かんきうっけつ」　「肝火上炎証　かんかじょうえん」
「肝胆湿熱証　かんたんしつねつ」

虚証に属す「肝血虚証　かんけっきょ」　「肝陰虚証　かんいんきょ」
「胆気虚証　たんききょ」

虚実挟雑証に属す「肝陽上亢証　かんようじょうこう」
このほかに「胆鬱痰擾証　たんうつたんじょうしょう」
「寒滞肝脈証　かんたいかんみゃく」がある

肝気鬱結　かんきうっけつ



【病因病機】

過剰または長期に及ぶストレスや緊張が、肝の主疏泄が失調することによって起こる

【病状特性】

主疏の失調による精神症状（急躁易怒など）が顕著に見られるが気機に関しては昇発過度による症状よりも気機不暢によるものが中心となる

【治法方薬】

疏肝解鬱　そかんかいうつ

疏肝理気　そかんりき

柴胡疎肝散　さいこそかんさん

柴胡疎肝散　さいこそかんさん

柴胡　さいこ
芍薬　しゃくやく
枳実　きじつ
炙甘草　しゃかんぞう

→ 四逆散の組成

川芎　せんきゅう
香附子　こうぶし
青皮　せいひ

→ 疏解行気・和血止痛

肝気が鬱結し疏泄が停滞して気血が渋滞したために、
胸脇痛・寒熱往来などに用いられます

肝火上炎　かんかじょうえん

【病因病機】

長期に渡るストレスによって気鬱化火となるか、
あるいは激怒が原因となり、昇発が過度になって
肝気が上逆すると起こる

【症状特性】

主疏泄の失調による症状に加えて、鬱熱が肝胆経を上逆するため
目赤・偏頭痛・眩暈・耳鳴・難聴・不眠などの症状が現れる

【治法　方薬】

清肝瀉火　せいかんしゃか　（内風が顕著な場合は鎮肝熄風）

方剤　柴胡疏肝散　さいこそかんさん

龍胆瀉肝湯　りゅうたんしゃかんとう

竜胆瀉肝湯 りゅうたんしゃかんとう

竜胆草　りゅうたんそう → 大苦大寒

黄芩　おうごん
山梔子　さんしし → 瀉火清熱　三焦通利

沢瀉　たくしゃ
木通　もくつう
車前子　しゃぜんし → 湿熱を小便として排泄する

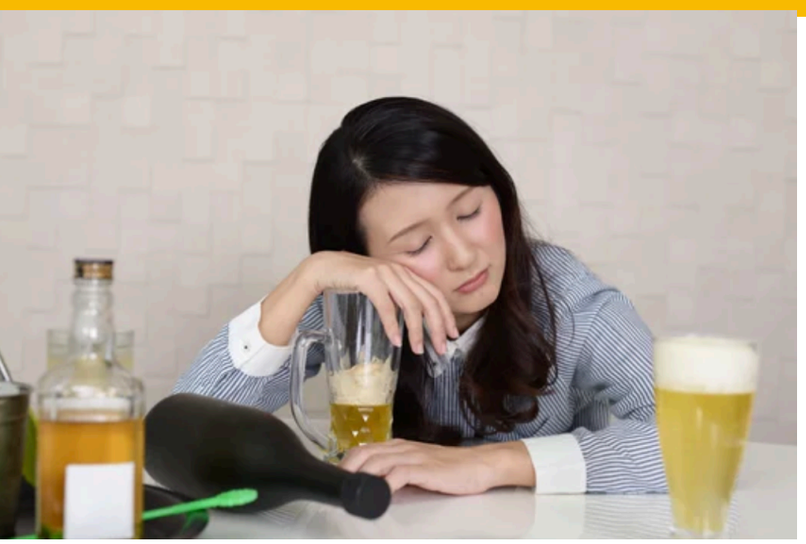
柴胡　さいこ → 諸薬を肝胆系に引導し、肝気を疎通して化火を防止する

生甘草　なまかんぞう → 全体の調整、緩急を緩める

生地黄　なまじおう
当帰　とうき → 滋陰養血

日本の方剤では柴胡が入っていないものが多く注意が必要です

肝胆湿熱　かんたんしつねつ



【病因病機】

飲酒や油物の偏食などで脾胃に湿熱が内生し、
これがストレスなどに乗じて肝胆に注ぐことによって起こる

【症状特性】

主な症状は、肝胆経に湿熱が鬱積するため、黄色い目やにや耳だれが出る・
口苦・陰嚢腫痛・陰部瘙痒・黄色い帯下などが現れ、ひどいと黄疸が見られる

【治法　方薬】

清利肝胆　せいりかんたん　　竜胆瀉肝湯

黄疸の場合は茵蔯蒿湯　いんちんこうとう

茵蔯蒿湯　いんちんこうとう

茵蔯蒿　いんちんこう → 苦寒により湿熱を清利

山梔子　さんしし → 三焦の湿熱を清泄下降

大黄　だいおう → 大便を通利して、中焦瘀熱を下泄する

湿熱による黄疸の妙薬です

熱が湿よりも重い脾胃湿熱証にも使われます

寒滞肝脈　かんたいかんみゃく

【病因病機】

寒邪が肝経に侵襲して、経気を阻滞することで起こる

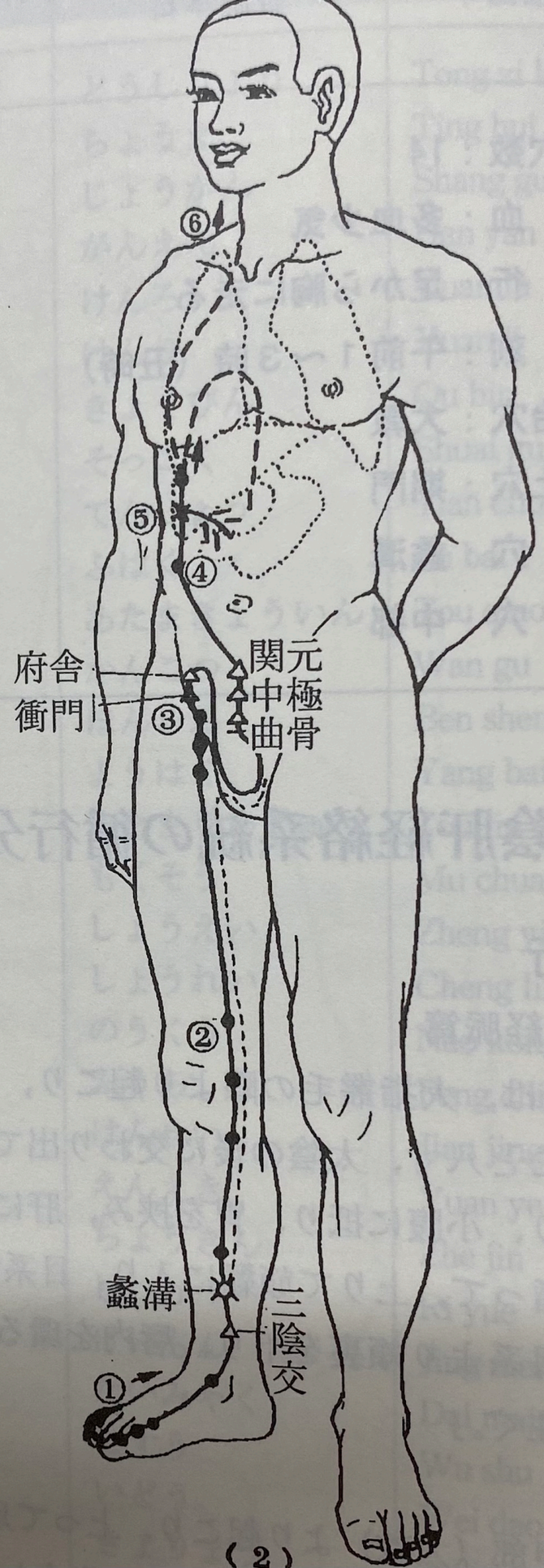
【病状特性】

主な症状は、小腹から陰器を纏って鼠径部に流れる肝経が寒邪によって収引・凝滞するため、小腹部及び陰嚢の拘急と冷痛（疝痛）が現れ、
ひどいと頭頂冷痛がみられる

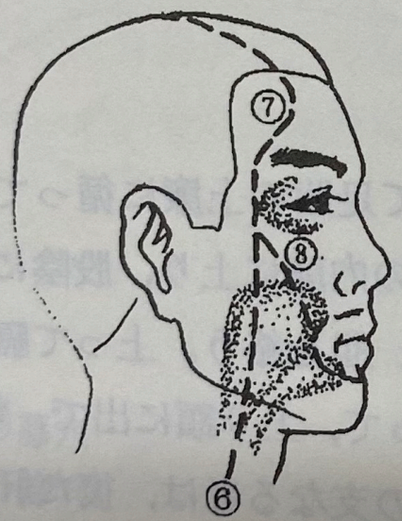
【治法　方薬】

温経散寒　うんけいさんかん、疎通肝脈　そけいかんみゃく
温経湯　うんけいとう

（1）



（2）



（3）

厥陰肝経の経脈

厥陰肝経の走行部位

温経湯　うんけいとう

呉茱萸　ごしゅゆ
桂枝　けいし
→ 温経散寒と通利

当帰　とうき
芍薬　しゃくやく
川芎　せんきゅう
→ 養血活血と調経

阿膠　あきょう
麦門冬　ばくもんどう
→ 養血潤燥

牡丹皮　ぼたんぴ
→ 活血清熱

人参　にんじん
炙甘草　しゃかんぞう
半夏　はんげ
生姜　しょうきょう
→ 養血祛瘀・和胃によって生化の源を益する

肝鬱痰擾証　たんうつたんじょうしょう

【病因病機】

肥満傾向にある人や日頃から飲酒などで内湿の多い人が、情志失調を受けると、気鬱による気機不暢で痰が内生する。これが熱化すると痰熱が互結し、胆気を擾乱することで起こる

【病状特性】

主な症状は、痰熱が胆気や神明を擾乱することで出現する胆怯・驚悸・煩燥不安・失眠多夢のほか、胆経の気機不利による胸脇脹満・口苦・眩暈・耳鳴などが見られる

【治法　方剤】

清胆化痰解鬱　温胆湯　うんたんとう

熱化が強い場合は　六神丸　ろくしんがん

温胆湯　うんたんとう

竹筎　ちくじょ
枳実　きじつ
半夏　はんげ
陳皮　ちんぴ
茯苓　ぶくりょう
炙甘草　しゃかんぞう
大棗　たいそう
生姜　しょうきょう

清化熱痰・止嘔除煩・清胆

降気・行気

二陳湯
にちんとう　の部分
燥湿化痰・理気和中

六神丸　ろくしんがん

麝香　じゃこう

牛黄　ごおう

蟾酥　せんそ

紅花　こうか

人参　にんじん

沈香　じんこう

羚羊角　れいようかく

虚証に属す主な肝胆病

厥陰肝経は「小気多血」なので、肝は血虚になりやすく
小陽胆経は「多気小血」であるため、胆気の損傷は
胆気虚証となって出現する

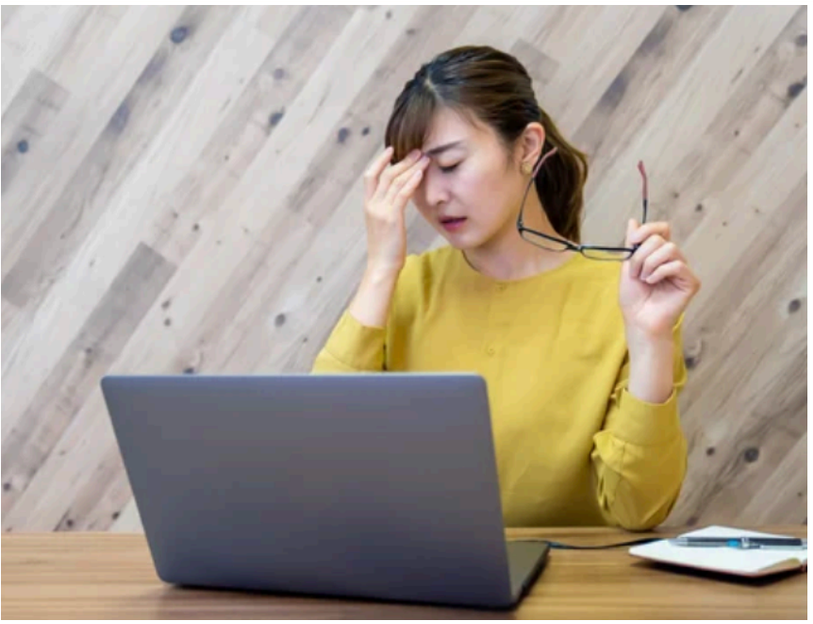
虚証に属す　肝胆病証

「肝血虚証　かんけっきょ」

「肝陰虚証　かんいんきょ」

「胆気虚証　たんききょ」

肝血虚証　かんけっきょ



【病因病機】

元々痩せ型の人は陰血不足の体質とされるが、こうした人に過労や食事の不摂生が続くことによる血の損耗や生血不足があると起こるほか、肝臓の慢性疾患で血が消耗したり、あるいは出産や月経過多及び事故などで出血が多くなったりすることで起こる

【病状特性】

肝血が栄養する目・爪・筋・女性の月経血に影響が出て、目のかすみや乾燥・夜盲・眼精疲労・眩暈・爪がもろく色が淡い・筋肉のひきつりやふるえ・経遅・閉経などが現れる

【治法方薬】

養補肝血　ようほかんけつ　杞菊地黄丸　こぎくじおうがん

杞菊地黄丸　こぎくじおうがん

熟地黄	じゅくじおう	→	滋補腎陰	三補
山茱萸	さんしゅゆ	→	養肝益腎	
山薬	さんやく	→	滋腎補脾	
牡丹皮	ぼたんぴ	→	清肝火	三瀉
沢瀉	たくしゃ	→	瀉腎濁	
茯苓	ぶくりょう	→	利水健脾	
枸杞子	くこし	→	養肝明目	
菊花	きくか	→	平肝明目	

三補三瀉の六味丸に養肝の枸杞子と菊花を加えた形です

肝陰虚　かんいんきょ

【病因病機】

肝血虚が進み虚熱を伴うようになるか、肝火上炎が慢性化して陰血が損耗すると起こる。

【病状特性】

肝血虚証による症状が、入浴などで温まった後や疲れた日の夕方から夜間に現れやすいという特徴を持つ。ただし、肝経に虚熱が影響すると、月経不順は経遅から逆に経早になるほか、目赤や頭頂部の熱感などが現れる

【治法方薬】

滋補肝陰　じほかんいん　（陰虚内風が顕著な場合は滋陰熄風）

知柏地黄丸　ちばくじおうがん　　七物降下湯　しちもつこうかとう

知柏地黄丸　ちばくじおうがん

熟地黄　じゅくじおう → 滋補腎陰
山茱萸　さんしゅゆ → 養肝益腎
山薬　さんやく → 滋腎補脾
→ 三補

牡丹皮　ぼたんぴ → 清肝火
沢瀉　たくしゃ → 瀉腎濁
茯苓　ぶくりょう → 利水健脾
→ 三瀉

知母　ちも
黄柏　おうばく
→ 苦寒瀉火

三補三瀉の六味丸に
滋陰清熱の知母と黄柏を加えた形です

七物降下湯　しちもつこうかとう

当帰　とうき
芍薬　しゃくやく
川芎　せんきゅう
熟地黄　じゅくじおう

→ 四物湯の組み合わせ

黄耆　おうぎ → 補気昇堤
釣藤鈎　ちょうとうこう → 平肝熄風
黄柏　おうばく → 清熱下に引経

日本初の処方　高血圧やのぼせ、疲労感などに使われる

胆気虚証　たんききょしょう

【病因病機】

精神的な疲労によって胆気が損耗し、それによって主決断が無力になると起こる

【病状特性】

胆怯の症状（おびえ・不安感・驚きやすい・恐怖を感じやすい・不眠多夢・優柔不断で決断ができないなど）が顕著に現れ、胆経に異常が及ぶと耳鳴りや幻聴などを伴うこともある

【治法　方薬】　補益胆気　ほえきたんき　加味帰脾湯　かみきひとう
と温胆湯　うんたんとう

加味帰脾湯　かみきひとう

黄耆　おうぎ
人参　にんじん
白朮　びゃくじゅつ
茯神　ぶくしん
炙甘草　しゃかんぞう
生姜　しょうきょう

→ 補気の組み合わせ
四君子湯＋黄耆&生姜

当帰　とうき
竜眼肉　りゅうがんにく
酸棗仁　さんそうにん
遠志　おんじ
大棗　たいそう

→ 補血の組み合わせ
心血を補います

木香　もっこう

→ 中焦の理気

柴胡　さいこ
山梔子　さんしし

→ 疏肝理気と清熱

温胆湯　うんたんとう

竹筎　ちくじょ
枳実　きじつ
半夏　はんげ
陳皮　ちんぴ
茯苓　ぶくりょう
炙甘草　しゃかんぞう
大棗　たいそう
生姜　しょうきょう

清化熱痰・止嘔除煩・清胆

降気・行気

二陳湯
にちんとう　の部分
燥湿化痰・理気和中

肝陽上亢　かんようじょうこう

【病因病機】

肝火上炎の人が、慢性化や加齢によって肝陰または肝腎の陰が損耗するか、あるいは肝陰虚の人が情志刺激を受けて気鬱化火すると、肝火上炎と肝陰虚が挟雑するようになって本証に至る

【症状特性】

肝火上炎の症状と肝陰虚の症状が入り混じって現れるが、平素はどちらかというと肝陰虚の割合の方が多く、春先や感情が高ぶると肝火上炎の割合が多くなるのが一般的である。そして、その肝火上炎の割合が多い時には、内風が起きやすい

【治法　方薬】

平肝潜陽（亢進した肝陽の抑制と、損耗した肝腎の陰の滋養を同時に行うことで肝の陰陽調節をはかること）肝陽化風の場合は平肝熄風

漢方製剤　：標治には竜胆瀉肝湯＋釣藤散、本治には杞菊地黄丸

肝火上炎と肝陽上亢の違い

肝火上炎

肝陽上亢

共通の症状

- 頭痛
- 眩暈
- 耳鳴
- 顔面紅潮
- 目の充血

異なる症状

肝火上炎

- 舌紅・苔黄・脈弦数
- 脇肋部灼痛・吐血

肝陽上亢

- 舌紅（絳）
- 脈弦細数
- 心悸・健忘
- 足腰がだるい

竜胆瀉肝湯　りゅうたんしゃかんとう

竜胆草　りゅうたんそう　→　肝胆実火を清瀉する

黄芩　おうごん
山梔子　さんしし　→　瀉火・清熱と三焦通利　竜胆を補佐する

沢瀉　たくしゃ
木通　もくつう
車前子　しゃぜんし　→　湿熱を小便として排除し、また、上部の熱を下泄する

柴胡　さいこ　→　諸薬を肝胆経に引導して肝気を疏通する

生甘草　なまかんぞう　→　清熱と諸薬の調和

生地黄　しょうじおう
当帰　とうき　→　滋陰養血、陰血に損傷が及ばないようにする

日本の竜胆瀉肝湯には柴胡が入っていないので、
柴胡が入っている方剤と一緒に使ってください

釣藤散　ちょうとうさん

釣藤鈎　ちょうとうこう
菊花　きくか
防風　ぼうふう

→ 平肝熄風

陳皮　ちんぴ
半夏　はんげ
人参　にんじん
茯苓　ぶくりょう
炙甘草　かんぞう
石膏　せっこう

→ 益気健脾・化痰

→ 上焦の熱を清する

高血圧や頭痛にもよく使われる方剤です

杞菊地黄丸　こぎくじおうがん

熟地黄	じゅくじおう	→	滋補腎陰	三補
山茱萸	さんしゅゆ	→	養肝益腎	
山薬	さんやく	→	滋腎補脾	
牡丹皮	ぼたんぴ	→	清肝火	三瀉
沢瀉	たくしゃ	→	瀉腎濁	
茯苓	ぶくりょう	→	利水健脾	
枸杞子	くこし	→	養肝明目	
菊花	きくか	→	平肝明目	

三補三瀉の六味丸に養肝の枸杞子と菊花を加えた形です

次回のセミナー

12月6日（月）　インスタライブ

12月7日（火）　zoom講義

19時30分開始